作品タイトル

『虎の咆哮』

元にした作品のタイトル

『女か虎か』　　Ｆ・Ｒ・ストックトン

著者名

川瀬えいみ

あらすじ

あらゆることから逃げて何も選ぶことのできない優柔不断の僕のために、父が用意してくれた二つの扉。
どちらかの扉の向こうには、誠実とは言い難い同性の恋人がいて、もう一方には政略結婚の相手がいる。
父と母と妹が僕に選ぶようにこっそり指し示した扉は、それぞれ異なっていた。
僕が選ぶ扉は……。

特記事項

選ぶことを避けて逃げてばかりいると、その先にあるのは……。

本編文字数

4786 字

僕の目の前には二つの扉があった。どちらか好きな方を選べと、父は言う。

大学卒業後、生産性のあることを何一つせず何年もふらふらしたあげく、来月にはついに三十路突入。怠惰で優柔不断な跡取り息子のために、父がお膳立てした悪趣味な茶番劇の舞台上に、今、僕はいる。

父はさながら、伝統ある歌劇場の二階正面ロイヤルボックス席で、舞台に立つ哀れな道化役者の僕を、高みから見下ろしている絶対君主といったところだ。ロイヤルボックス席の下に、僕が選択を迫られている二つの扉がある。

まあ、実際には、僕が立っている場所は舞台というより平土間だし、そもそもここは歌劇場じゃないが。

ここは僕の家――というか、父が家長を務める橘家のエントランスホールだ。三階までの吹き抜けという馬鹿げた構造になっている（一応）一般住宅。この手の建物につきものの正面階段はなく、代わりにあるのがホールを囲む二つのサーキュラー階段。ホール左右それぞれから上にのびている階段は、エントランスホールを見下ろせるようになっている二階の回廊に繋がっている。

父は、二階回廊の中央から、エントランスホールにぼんやり突っ立っている僕を、絶対王政時代の国王よろしく見下ろしている――というわけだ。

回廊の真下に、二つの応接室に続く扉がある。祖父が存命だった頃には父と祖父が、祖父が亡くなってからは父と母がそれぞれに自分の来客をもてなすのに使っている部屋だ。その部屋に続く二つの扉が、今は、『女か虎か』の円形闘技場の二つの扉の代わりを務めている。僕はそのどちらかを選ばなければならない。

Ｆ・Ｒ・ストックトンの『女か虎か』では、女の扉を選べば命拾いができ、虎の扉を選べば一巻の終わりだったが、僕が選択を強いられているのは生と死のいずれかではない。

二つある扉の一方の向こうには、僕の同性の恋人がいて、もう一方の扉の向こうには、父が選んだ政略結婚の相手（当然、女）がいるんだ。

右と左、どちらに誰がいるのかを僕に知らせないのは、優柔不断な僕が選択の結果に責任を感じなくていいようにするための、父の親心であるらしい。父当人がそう言った。

父の気遣いには有難くて涙が出る。これは皮肉ではなく、本心だ。

恋人と政略結婚相手の二人を目の前に置かれて、「どちらかを選べ」と言われたら、僕は永遠にどちらを選ぶこともできないだろう。僕はそういう人間だ。そして、僕がこんなふうに優柔不断な屑人間になった原因は両親にある。

僕の父と母はいわゆる政略結婚で、夫婦になった。

戦後のどさくさに紛れて成り上がり、莫大かつ強固な財を築いた父の家。家柄は申し分ないが、戦後の華族令廃止で見る影もなく落ちぶれた母の実家。

母は好きな男がいたのに、家門を守るために父と結婚した。家や当人のスペックより当事者の気持ちが重視される恋愛結婚全盛の時代に、僕の父母の結婚はかなり時代にそぐわない（時代遅れ、もしくは時代を先取りしすぎた）ものだったろう。

良家の血を汲む跡継ぎを求めた父。金で買われたという意識を払拭できず、どうしても父を好きになれなかった母。

そんな二人の間に僕が生まれたのは、二人の結婚から三年後のことだった。

目的のものは手に入れたのに、父が母と夫婦でい続けたのは、どうやら僕が全く父に似ていなかったから、らしい。父は母の托卵を疑ったんだろう。父は母に確実に自分の血を受け継いだ子どもを産んでもらう必要があったんだ。

母が父以外の男と破倫の罪を犯していたのは事実のようだ。母は、結婚前の恋人をどうしても忘れてしまえなかったらしい。

僕が本当に不義の子なのかどうか、さっさと確認すればいいのに、父はそれをしない。生後間もない頃ならともかく、今なら信頼できる精度のＤＮＡ鑑定がいくらでもできるだろうに。

血統はどうあれ子どもがいれば手駒として何かに使えると考えているのか、離婚は体裁が悪いと思っているのか。案外、僕が実子でなかった場合に生じる面倒事を避けたいだけなのかもしれない。

父には、母以外の女はいない。父は家の財を増やし、己が権力を増すゲームに夢中なんだ。

そんな両親を見てきたから、僕は男女が営む夫婦という関係に全く希望を見い出すことのできない人間に育った。そんな関係が人生に幸福をもたらすとは思えない。結婚というものをしたくない。女を信用できない。自分の子どもを持つのも怖い。それでいて生涯を一人きりで生きる勇気も持てず、だから僕は女でないものに逃げたのかもしれない。

僕はいつも裏切りを怖れている。僕自身は、周囲の人間を裏切ってばかりなのに。

両親が離婚しないのは、僕より二つ年下の妹がいて、こちらは父にそっくりだから――という事情もあるかもしれない。

母には一人で生きていけるだけの生活力はなく、母の実家も父の援助なしにはやっていけない。

僕の家族は、愛ではないもので、分かち難く結びついているんだ。

そんな両親を見て育ったせいだと思うが、間違いなく父の血を継いでいる妹の価値観も結構おかしい。

妹は、なんと、男同士の恋愛小説を書いている。いわゆるボーイズラブ小説というやつだ。かなり売れているらしい。ジャコビアン様式の調度をバックに著者近影を撮る企画とかで、何人ものスタッフが我が家に押しかけてきたことがある。

妹の書くものがそういう趣向なのは、彼女も僕同様、男女の恋には夢も希望も持てていないということなんだろうと、僕は勝手に思い込んでいたんだが、実際のところはよくわからない。

以前、冗談で、「ゲイの実態を教えてやろうか」と言ったら、「やめて。そういうのは興味ない。わたしが書いているのはファンタジーだから！」と、嫌悪感丸出しの目と声で拒絶された。

一つ確実に言えることは、妹は僕の味方ではないということ。自分の才で稼ぐことができている妹が、定職に就かず親の金でふらふらしているだけの兄を軽蔑するのは、至極当然のことだろう。

家を出て自立しようと思えばいつでもそうできるのに、彼女が実家に留まっ

ている理由は、家族への愛情や財産への執着ではなく、使用人のいる家が便利だからにすぎない。

僕の現パートナーが僕に対して誠実でないことは知ってる。僕がゲイなのは両親への反発。僕のような不幸な子どもを増やさないために男に走っているようなもの。逃避と消去法の帰結地点が、今の僕の立ち位置だ。彼はその事実を知っている。そんな二人の間に、本物の愛情は生まれず、絆が育まれることもない。僕たち二人の間にあるのは、せいぜい同情と金。僕たちは、そういうドライな関係が気楽で心地いいんだ。

にもかかわらず、こんなところに引っ張ってこられて――彼は、僕に選ばれても困ると思っているだろう。

父が選んだ婚約者の方は、僕は顔も知らない。もちろん、僕に対する好意は彼女の中に微塵もないだろう。

親のいいなりになっているのか、親に泣きつかれてしぶしぶやってきたのか。意外にビジネスライクな女ということもありえる。僕の母のように結婚後の不倫を目論んでいるのかもしれないし、子どもを産めば妻としての務めは終わりだと考えて、その後の悠々自適な生活を夢見ているのかもしれない。

いずれにしても、彼女が今ここにいるのは、橘家の財に価値を認めてのことだ。

こんな馬鹿げたイベントを企てる直前、父は、「自分で責任を負う気があるなら、同性の恋人と橘の家のどちらか好きな方を、自分の意思で選べ」と、僕に言った。

同性の恋人を選ぶなら、日本人の平均生涯賃金相当額を与えて、僕とは絶縁する。僕への相続は生前に完了したと見なす遺言書を作成し、他の橘家の財産はすべて妹に継がせる。だが、無益な放蕩をやめて橘の家のために努めるなら、日本人の平均生涯賃金相当額の五千倍の財産がおまえのものになるぞ――と。

あまりに少ない金で相続放棄することを提案され、僕は迷った。決断することができなかった。

そんな僕の様子を見て呆れ果て、父は「“女か虎か”方式でいこう」と言いだしたんだ。

「本当は、どこぞのスタジアムでも借りて、男と虎のどちらかを選ばせてみたいというのが本音だが、虎の輸入はワシントン条約に引っかかるからな。虎の代わりに政略結婚の相手を用意した」

薄い嘲笑と共に、父はそう言った。

男を引き当てたら、僕は、小金をもらって橘家とは絶縁。自由だが、寄る辺ない根無し草になる。

女を引き当てたら、見知らぬ女を伴侶として受け入れ、莫大な財を有する橘家の奴隷になる。父は不肖の息子のために有能なスタッフを用意するだろう。そして、僕は永遠に自由を失うんだ。

優柔不断な僕は、決断の時を少しでも先延ばしするために父の提案を受け入れ、今に至る――というわけだ。

二階の回廊の中央に父。父の左手に母。右手に妹。三人揃って高みの見物。

責任を負わなくていいのは気楽だと思いつつ、この期に及んで、僕は左右どちらの扉も選べずにいた。僕は優柔不断というより、ただの臆病者なんだと思う。

眉根を寄せて再び二階の廊下にいる家族を仰ぎ見た僕は、妹が、左手を重ねて隠している右手の人差し指で、左を指し示していることに気付いた。左を選べということか？

妹は家の跡を継がされて自由を失う事態は御免被りたいだろうし、兄の性嗜好を受け入れ難く感じているんだから、僕には女を選ばせたいはず。だが、橘家の財力はそう簡単に切り捨てられるものだろうか。妹は、僕にどちらを選んでほしいと思っているんだろう？

彼女は兄の幸せを願っているだろうか。それ以前に、兄の幸せをどういうものだと思っているだろう。自由でいること？　性嗜好でマイノリティでないこと？　経済的に苦労しないこと？

そんなことはどうでもよくて、我が身の安泰だけを望んでいるパターンもあるか。

答えを見い出せず、僕は今度は母を見た。

母は、右手を重ねて隠している左手の人差し指で、右を指し示していた。右を選べということなのか？

母は、愛情のない結婚というものを憎んでいるだろう。娘には「恥ずかしい仕事はやめなさい」と常々言っている。そんな母は、僕にどちらを選んでほしいと思っているんだろう？

彼女は、僕に橘の家を継がせたいと考えているだろうか。僕がもし母の不義の子であるなら､父の血が入っていない僕を橘家の当主にする乗っ取り行為は、自分を金で買った橘家への復讐になる。逆に、罪悪感からそんな不正を避けようとする？

彼女は息子の幸せを願っているだろうか。それ以前に、息子の幸せをどういうものだと思っているんだろう。

母も、実は、息子のことなどどうでもよくて、我が身の安泰だけを望んでいるかもしれない。

そして、この茶番劇を企画した父はどちらを望んでいるんだろう。

これを機に、血が繋がっていないかもしれない不肖の息子ときっぱり縁を切りたいと考えている？　それとも、不肖の息子を使って、橘家に益をもたらす資産家の令嬢を有効活用し、橘家を更に大きくすることがいちばんの望みなんだろうか。

父が托卵を疑っているのか､僕を実子と信じているのかどうかもわからない。親子鑑定をしない理由も心理もわからない。

父は僕の幸せを願っているだろうか。僕の幸せをどういうものと考えているんだろう。

それ以前に、僕はどちらを選びたいんだろう。誰の望みを叶えたい？

僕は、誰かの幸福を願ったことがあるだろうか。

そもそも僕は幸福になりたいのか？

その答えを求めるように、僕は父を仰ぎ見た。僕自身の心ではなく、父を見

た。

　その父が、母と同じ右を示す。無表情のまま。

　父は僕にどちらを選ばせようとしているんだろう。その指示に僕が従うと考えて『右』を指しているのか、反発すると考えて、あえて逆を指しているのか――。

　父は僕をどう思っているんだろう？

　それを確かめるために、僕はふらふらと歩きだした。

　空耳だろうか。二つの扉の向こうから虎の咆哮が聞こえてきたような気がした。